

ポスト冷戦期＝人類史的過渡期における
資本主義＝アメリカ的ラウンドの構図

原 田 國 雄

I. 問題の概括

2008年リーマンショック後の世界金融危機とつづいて各国の財政危機を経済循環論でいかに説明するか—これを中心的課題にかかげる現代資本主義論には、1989～91年の米・ソ（中）冷戦対抗の終結とその後の世界に対するある共通の認識が前提されていたように思える。冷戦の終結はソ連を中心とする社会主義世界体制の崩壊によるものであり、アメリカは「冷戦の戦勝国」「唯一の超大国」としてその後の世界をアメリカ化＝グローバル化してきた。この周知の事実から現代資本主義論者が引きだしたアメリカへの評価と過程は—アメリカは資本主義としてなお拡大強化の過程にあって、今回の一連の危機も世界のアメリカ化＝グローバル化がはらむ矛盾の顕在化したものだ—というものであった。もともと現代資本主義論のアメリカ経済論には冷戦体制に関する議論が欠落していたこととを思えば、それは当然なのだろう。それに対して同じ事実から出発し、その由来にまで遡って90年代以降をポスト冷戦期として劃期する必要を認めたい。すでに70年代にはじまるアメリカの冷戦体制＝冷戦帝国主義の解体から再編へのプロセスのなかで、あらためて90年代以降のポスト冷戦期を位置づけようという、冷戦帝国主義論の流れがある。本稿も、その流れのなかにある。

冷戦の終焉はアメリカ側の要因にも起因する。冷戦体制＝冷戦帝国主義（帝国主義のうえに立つ帝国主義）の解体である。しかも、その解体過程で作用した根本的要因の一つとおぼしき「科学」の役割の圧倒的な増大—いまや中枢神経から抹消神経へと身体全体にまで広がっている—に資本と国家がどう対応するのか。この国の資本主義の命運を左右するほどの事態が眼前で展開しつつあった。

1990年代以降、ポスト冷戦下での資本による「ネット新世界」（「科学の世界」）への対応がまさにそれだ。と云うのは、「独自の・資本主義的な生産様式」としての「機械と大工業」の地位と役割が揺らぎはじめた一方で、「新世界」（ヴァーチャルであるが同時にリアルでもあり、リアルであるが同時にヴァーチャル

でも「独自の包摂」も、
「用その二三」から論生グ基サこ
「アルミサイの理」
「げやの科学の」
「ナミサイの理」

に「と急を」おけは「核」新「鋭」の軍事的IB」一それは、再生産表式として、
「ハッナ」に「急を」おけは「核」新「鋭」の軍事的IB」一それは、再生産表式として、
「と急を」おけは「核」新「鋭」の軍事的IB」一それは、再生産表式として、

2) ベトナム敗戦後の1970年代以降、冷戦帝
主義のキ産業「軍事的IB」の維持が財上難
しく再建を賭けて、軍事的IB体系からME基
コンピユそれを在来の金属・機械工業に代
経済の季節リスクが資本経営の内部に実
するた。

3) ポスト冷戦下の1995年に資本がネットを「発
見」し、それに「突進」しはじめた。このとき「ネ
ト新世」はすでに「独自の・ネット的な生産機式」
を生出しており、それから5年後の2000年にアメ
リカは「インターネット不況」(新しい恐慌)を、そ
の翌年には「9.11」(新しい戦争)を体験したのである。

*

とこるで、1987~90年日本の「土地バブル」下での
「日米(経済)逆転」後に、アメリカは新自由主義の
旗のとも資本最後の総反撃にでて、ネット対応と
ルで世界循環を保ちながら「日米再逆転」を果たした

もの、そのときアメリカは、グローバルゼーションの典型、BRICs、とくにアジアでアメリカと並ぶほどの経済力を身につけはじめた大陸的国家中国の大躍進に遭遇した。

資本主義の戦後段階を特徴づけるアメリカの生産力、海外拡散—それは、世界市場の拡大と同時にアメリカの海外世界の独占の敗退に帰結する—の第3段に、それは該当する。すなわち、1950年代以降の日本へ、その新鋭重化学工業=潜在的軍事産業の移植が第1段、70年代以降の日本に勝つためのME(マイクロエレクトロニクス)製造工程の韓国等アジアNIEsへの移転が第2段、2000年WTO加盟以降の中国へのネット、デジタル機器の奔出がその第3段であって、いずれもアジアへの拡散である。

それではなぜか、またなにが問題となるか。ここで日本や韓国、中国等における経済の3層格差の形成が注目される。中国の場合、その頂点を先端的な生産技術、設備で装備した国営大企業が占め、そのまわりを社会主義の在来産業=地方中小零細企業群がとりまきました、さらにその最底辺で人民公社の解体後に形骸化した土地国有と固定化した零細農耕様式の農業—近代自給的、自我、個の觀念の発生母体たる「独立自営農民」層の成立を一度も許してはいない—が低賃金の供給基盤となり、社会の基層ともなって上記2つの層を支えてきた。じつは20世紀の資本主義も社会主義もアジア的基層社会の克服に失敗したが、「ネット新世界」の構築はその克服に道を開くものであった。新世界を「過渡期」の全展開の軸点としたいま一つの理由がそこにある。いまやそうした新旧両世界の対抗と相互浸透が軸となる世界の中心舞台として中国があらわれ、アメリカ資本主義のアジア、中国への対応が改めて問われる。

*

ポスト冷戦期を、本稿では、人類史上における「前史」から「本史」への大転換が進行中の、その意味で「過渡期」にあると看做したうえで、いまは過渡期の資本主義=アメリカ的ラウンドにあると想定している。「過渡期」とした理由は二つある。一つは、資本と国商に先行して「ネット新世界」を構築したのが「非科学技術的世界」で草の根基盤の市民運動に軸足を置く科学技術者、研究者、ハッカーたちであり、また彼らの「一般的な労働」が「労働時間によって計測できないうる労働」であった、つまりは「価値の否定」が「ネット新世界」であったという点。いま一つは、コンピ

ータのパーソナル化（分散化）によって、無数の情報や知識の個人の社会的力能への転化が可能となつた。やうえさらに、幾つものパソコンをフラットに双方向で繋ぐこのコンピュータのネットワーク化（共有）によつて、かつてマルクスが『経済学批判要綱』で展望した「自立的な個体」からさらに「社会的な個体」への転成、「個体的所有の復活」が現実味をおびはじめたという点である。

そしてその資本主義＝アメリカ的ラウンドに特徴的な資本の2つの展開形態—「ネット新世界」への対応と、中国等のアジア的基層社会への対応—について論じてみたい。だが、その試みも全体の構図と道筋を素描するにとどまり、それに関連する諸学説の紹介も、その裏付けとなる実証的分析も果たしていない。その意味で仮説の提示にすぎない。

II . 問題の前提—冷戦帝国主義の解体と再編

- A. 軍事的 I B と軍事インフレ循環
- B. 生産の ME 化と経済のサービス化・ソフト化

III . 問題の軸—ネット新世界の先行的構築

- A. 分散型パケット通信方式と草の根基盤
- B. コンピュータのパーソナル化とネットワーク化
— 三つのハッカー文化と倫理 —
- C. GPL（一般公共使用許諾契約書）と
「独自の・ネット的な生産様式」

IV . 問題の展開—資本のネット対応とアジア対応

- A. 資本のネット対応
 - 1. パソコンのネット端末化と著作権問題
 - 2. 新資本蓄積様式と株式バブル
 - 3. ブロードバンド化と資本のネット対応の新展開
- B. 資本のアジア対応
 - 1. アメリカからアジアへの生産力拡散の三段階
 - 2. アメリカの中国対応

IV , 問題の小括

- A. 『経済学批判要綱』における過渡期論
 - 1. 歴史の発展の三段階論

マルクスにおける「科学」の問題

A. 『資本論』; 「一般的科学的労働」の概念

1. 労働の生産力は「科学およびその技術学的応用可能性の発展段階」によって規定される (I ① 121)。
2. 「科学を自立的な生産力能として労働から分離して資本に奉仕させる大工業において完成する」(長谷部訳。青木文庫 I ③ 599。傍線は引用者)。
3. 「科学は資本家にとり全く『何も』要費しないが、このことは決して資本家が科学を利用することを防げない。『他人の』科学が他人の労働と同様に資本合体される」(I ③ 632)。
4. 「科学および技術は、機能資本のあたえられた大いさに係りのない資本膨張の一力能を形成する」(I ④ 941)。
5. 「一般的労働と共同的労働とを区別せねばならない。この両者は生産過程でその役割を演じ、交錯しあうが、両者のあいだには区別がある。一般的労働とはすべての科学的労働、すべての発見、すべての発明である。それは部分的には生きた人々との協業により、部分的にはかこの人々の労働の利用によって、条件づけられている。共同的労働は個々人の直接的協業を内蔵する」(III ⑧ 173)。

*

B. 『経済学批判要綱』; 過渡期論の枢軸としての科学

1. 「労働時間一たんなる労働量一が資本により唯一の規定的要素として措定されればされるほど、生産一使用価値の創造一の規定的原理としての直接的労働とその量とはますます消失し、そして量的には小さな比率にひきさげられるとともに、また質的には、なるほど不可欠ではあるが、ある側面から見て一般的科学的労働、自然諸科学の技術学的応用にくらべて、また総生産における社会的仕組みから生じる一般的生産力一それは(歴史的産物ではあるが)社会的労働の天恵としてあらわれる一[に較べて]、従属的な契機として《あらわれる》。このようにして資本は、生産を支配する形態としての自己自身の解体に従事しているのである。」

このようにして…生産過程の単純な労働過程から科学的過程への転化一この科学的過程はもろもろの自然暴力をしたがわせて自己に奉仕させ、またそれ

らの暴力を人間のもろもろの欲望に奉仕するよう
作用させらるゝが、固定資本の属性として生きて
に對立あらわれ…、《すなわち》そのものとして
個々の労働は一般に生産的なものとしてあらわれ
なくなり、むしろもろもろの自然緒力を自己に從
させる共同的な諸労働のかたちだけ生産的であ(る)]
(高木幸二郎 監訳 大月書店版 III 648~649)。

2. 「大工業が發展すればするほど、現実的富の創造
は労働時間と充用された労働の量とに依存するより
も、むしろ労働時間中に動員される諸作用因の力に
依存するようになる。そしてこれらの作用因はそれ
自身ふたたび一それらの強力な効果はそれ自身ふた
たび一それらの生産に要する直接的労働時間に比例
しないで、むしろ科学の一般的状態と技術学の進歩、
またはこの科学の生産への応用に依存する(この科
学の、とくに自然科学の、そしてそれとともに他の生
産あらゆる科学の發展は、それ自身ふたたび物質的
生産の發展に比例する)」(同上、653)。

3. 「大工業が發展すればするほど…人間労働は、も
はや生産過程に内包されたものとしてあらわれないで、
むしろ人間が、生産過程それ自体に對し、監視者な
いしは統御者として關係する。…労働者は、生産過
程の主作用因ではなくなつて、生産過程のいわば外
に、あるいはその傍らに立つこととなる。このよう
な、転換が生じると、生産や富の支柱は、人間自身
が行う直接的労働でもなければ、かかれが労働する
時間でもなくて、人間自身の一般的生産力の自己選
すなわち人間が社会的存在であることを通して自ら
のものとしてその知識と自然の支配という意味
での一般的生産力の自己還元、一口で言えば、社
会的個体の發展であつて、これが生産と富の支柱と
てあらわれるのである。現代の富の基礎となつてい
る他人の労働時間の窃盜は、この新たに發展した、
大工業それ自身の創造した基礎にくらべればミゼ
ブルな基礎にみえる。直接的形態での労働が富の偉
大な源泉であることをやめてしまえば、労働時間は
大富の尺度であることをやめ、またやめざるをえ
ないのであつて、したがつてまた交換価値は使用
価値の尺度であることをやめ、またやめざるをえ
ないのである。大衆の剰余労働はすでに一般的富の
發展に對してはなかつており、同様にまた少数者
の非労働は人間の頭腦の一般的緒力の發展に對
してはなかつていない。それとともに交換価値
に立脚する生産は崩壊し、直接的物質的生產過程は、
それ自身窮迫性と對抗性とをはぎとられた形態をう

けとる。もろもろの個性の自由な発展、またしたがって剰余労働を算出するための必要労働時間の引き下げではなくて、一般に社会の必要労働のある最低限への縮減、その場合この縮減には、すべての諸個人のために遊離された時間と創造された手段とによる諸個人の芸術的・科学的等の教養が照応する」（同上、653～654）。